第３３９回　芹沢光治良文学愛好会

テキスト　幸福の鏡　第一回
司会　池田三省氏
鈴木さんから韓国旅行の報告。

Ｓ：小林さんの「文学と人生」をホームページで見て感激した。現役で仕事をしている身としては、とても参考になった。このレジメについて、満州新報に連載。若い娘達は何を考えているかを小説とした。全部書いたあと、この題は余りよい題ではなかった。ミッセの詩の題名について書かれる。Ｐ２３７までに出てくる登場人物をあげている。恋愛関係が入り組んでいる。作者が意図して作ったのではなく、神様が意図して作ったのではないか。恋愛関係が様々に展開する。若い娘の時代の関係。藤田・ふさの時代の関係。戦時中の女性が未亡人を覚悟していたのか。昭和１３年に直子がいたのか。現代女性は女の女性をどう考えているか。もし先生が生きていれば今の女性をどう書くか。男の幸せは何か。奇蹟を信ずるか信じないか。これらの問題をゆっくり考えて行きたい。

Ａ：範囲の中しか読んでいない。題名はＰ２０６に出てくる。幸福は、どんな風にも写るものである。自分の幸せし感じていない。幸福は自分の納得だけではないか。鏡を磨くのは謙虚さであり、感謝する心ではないか。トシ子は姉の苦労とか学費に感謝して慎み深くある必要ではないか。大臣の娘をうらやむ今年か考えていない。贅沢が出来る結婚ばかり望むのは志が低いのではないのか。トシ子に対して好感を持てない。直子のような女性は、結婚しないで夢を追いかけるだけではないか。自分の熱情だけに生きる男性では直子の望みを叶える男性ではないのではなかろうか。小川にとっての妻は家政婦しかなかったのではないか。家政婦のための教育がだんだんくずれだしたのがこの時代。家政婦だけでは望めない女性が増えてきた。

Ｓ：テーマの③にどちらに生きているか。母のように旦那の出世を願うのは多いのではないか。家庭と自分の両方を求めるのが多いのではないか。

Ａ：これはバランスではないか。難しい。

Ｂ：この時代の小説を読むと大変難しい解釈になる。昭和１３年は小学校から女学校になった時である。Ｓさんがおっしゃったことからピントがはずれてしまう。戦争は昭和１３年では始まっている。私は中途半端の時代。この時代のいろいろなことを改めて先生の作品を解釈することになる。時代が違っているので、先のことも考えられない。

Ｓ：未亡人として覚悟したのか

Ｂ：わからない。近所突き合いはあまり無い。下町とは違っているのではないか。母の病

気がありまして引っ越した事はわからない。

Ｓ：作品として読んだときは、女性のことはどう思いますか。

Ｂ：こういう女性がいたとして読んでいる。
Ｓ：もしＢさん自身は、誰を支持しますか。

Ｂ：このごろは先生の作品を読むと時代の事を意識する。

Ｓ：国家総動員法については何か関わりがありましたか。

Ｂ：子供の頃２２６事件を感じたりした。旗行列、提灯行列、靖国にお参り肉ことなど。
　　戦時体制の学校を過ごしていた。昭和１３年の時代には男性全体に幸福があった。
　　甲乙丁丙があった。訓練させられるわけ。全員は招集されるわけではなく、自分の父を見ていると招集という訓練がある。男性の幸福は一端事が起これば、戦地に赴かなくてはいけない。平穏な無事なときであれば、全面的に家庭に考えられたと思うけど、当時の男性の幸福は正しい答えが出ないのではない。

Ｓ：昭和１３年の男の幸福は

Ｂ：義務。

Ｃ：久しぶりに先生の長編小説を読んで１３年というのはとても驚いた。その時代に時代背景。私が生まれた福島は、このようなお嬢様の世界は遠い遠い世界としか感じられない。この小説の展開は、女学生の中の生き方は、現代にも通用するところが多く感じられる。直子さんのとらえ方は、揺れ動く女性心が良く捉えられている。自分が小説を書きたい。しかし結婚しなければいけない。お姉さんと同居するがおめかけさんでどう接していくか、トミ子さん特有な生き方だと思う。トミ子はずるいと思った。この登場人物も良く捉えていられると思った。結婚のとらえ方も複雑で面白いと思った。直子さんの闘病生活で藤田さんとのからみがおもしろい。Ｐ２０６上段、闘病していて磨いた心境を考える。こちらの胸に駆けた鏡によっての表現が良くあらわれている。女性の幸福につながる。

Ｄ：幸福の鏡を夕べ読んで朝読んで、今読んでいる。ざっとした感想。新聞に書き始め単行本になる。昭和１４年、活字も古く、噛みもシミがだいぶ浮かんでいる。新しい文学館を読んで古い感じはしなかった。時代背景は、古いけど、先生の文章も古い感じはしない。先生の特徴だと思う。啓蒙的にかかれた。深窓のお嬢様、一人は国務大臣、当時大学に行って専門的に勉強する女性はほとんどいなかったのではないか。私の父親の世代で大学はほとんどいない。大学に行っている時代はほとんど女性はいない。批判されない仕掛けを作っていない。先生のうまさを感じた鏡という考え方。文学論で難しくなった。鏡の考え、鏡のごとく写すなり、天理の地場は鏡屋敷。鏡を一つの考え方の媒介。主人公の生き方、

誰に賛成するのではなく、合わせ鏡の形で啓蒙をとっている。奇蹟の説明が書いている。４２５ページ、愛の奇蹟が書かれている。神秘的な意味になっている。愛の奇蹟、先生の文学を理解する重要なキーワードではないか。どういう意味で奇蹟と使うか。一言でいうと文学を書くと言うことで奇蹟を生み出す。結婚に於いて愛の奇蹟を生み出す。文学において愛の奇蹟を生もうとする。

Ｓ：Ｄさん自身、家族の生活が男としての幸せなのか？男としてはどうか？

Ｄ：あんまり幸福ということを自分で考えた事がない。このままでよいのだろうか。違うあり方があるのではないか、読書の方法もそうだ、アランの幸福論を読んだ。

Ｅ：男の幸福は何か。成果を上げているのは幸福だと思おう。奥さんも同じ心持ちになれば。奥さん教育をすること。そういう風に喜びを感じる生き方が大切。自分の仕事を幸せにする事。男が生き生きとして行動していたら、子供や妻も生き生きとする。

Ｆ：御あの人の気持ちはさっぱりわからない。真面目に自立していきたいとうまくいくかどうか解らない。決めつけるのは何もないのではないのでは。Ｐ１６９に結婚して女子大を出ると仕込みにくいと発想はない。現実社会は誓約とか条件とかかなりある。自分の幸せとは何か、考えたことはない。世の中にどのように貢献したいですか。幸せは完成されない。幸せは究極的な最後ではないか。人間としてどうあるべきか考えている。まだ足りない。文化功労者もまだまだと自分でいう。

Ｇ：このころの女性は、３人の主人公が出てきている。うちのお袋が４人姉妹。明治４４年生まれ。このころは２７，８がお袋。一番下の妹は二十歳ちょっとぐらい。あのころおばさん達は、どんな気持ちだったか。どんな結婚をしていったか、考えている。本当にこのような女性がいたのか。事業をやってもどこまで出来るか。どういう風に読まれたか。どんな反応があったのか。うちの母親の姉妹からみるとちょっとついて行けない内容だと思った。もてるものともてないものとは願望が違ったものだと思う。直子をカバーするのは大変だと思う。当時の結婚観の思いは何か。現在の日本がどれほど男尊女卑はどうなったか。今は過度期ではないか。

Ｓ：昭和１３年の女性の考え方。

Ｓ：あんまり進歩していないのではないか。男性は随分進歩している。
　　〇〇でも進歩しているのではないか。結婚式に行った。物事を話し合いで決めてお互いを高めている。そういう意味で男性は、ひ弱になったかもしれないけど、女性はどう思うかというところがある。Ｅさんの幸福論は？

Ｅ：振り返ってみて自分のサラリーマンの生活、結婚など振り返れば意識するけど常にそう思っていない。

Ｓ：一般の人とはだいぶ違う。男の幸せは何か。妾を持つと言うことは、男の甲斐性。
　　堤さん（西武の）は、すごい。そういうことみれば男の甲斐性ではないか。なんら今、マスコミが普及してきて、同性に近い気がする。１年に１回同窓会で京都に帰る。幸せだったもの同士が集まる。その人が生涯を終えるとき幸せだったと思う。仕事上でのお客さんの相談を受けた礼だけども、官庁時代の意識が抜けないので「なんだそのいいかたは」となて問題になって、当事者で離婚になってしまう。良かったのか、悪かったのか仕事が終わったとき感じる。ＮＨＫのテレビで若者の番組。ニートが増えてきた。何をすればを見つけにくかった。女性は結婚しか幸せがなかった。本当にそれぞれ人によって幸せの尺度が違う。
Ｆ：９年前全部読んだ。２７３ページまでの中で、トミ子は策略家、直子がどういう結婚を歩んでくるかを楽しみにしている。昭和１７年春岩手から東京に遊びに行った。親しい友達に手紙を開いて読んだ。考えてみると、だんだん息苦しくなった。急激にきつくなった。ビンタを受けた。連帯責任。体操の先生は軍人で厳しかった。先生方はとまどった。素直でかわいかったと言うけど、そのまま受けていた。先生に反論が出来なかった。

Ｓ：Ｆさんに聞きたい。直子の生き方、松橋さん個人の生き方として、どうか

Ｆ：母親としてがいい。自分の生き方がどうしようと思った。落胆があった。光治良の先生を呼んで

Ｇ　：これは、久しぶりに長編を読んでわかりやすく読んでいった。面白く読みました。内容的にはおおらかな女子学生はおもしろかった。時代背景は、もっと前に書いたのではないか。女子大が活発に生き生きしていた時代ではないか。初めの方は、「巴里に死す」とくらべて大雑把だったけど、読見込まれていった。前から未解決な部分を作っている。三頭政治という４行目　「来い」とか、なぞめいた台詞があちこちちりばめられている。少しずつたまっているのでのめり込んでいくのではないか。随所に散りばめられている台詞、８畳に座っているところ、からっとしないところなど、表現として面白く読める。戦前の時代と今の時代を比べてみると、男も女も後退している。化粧をしている女性はたまらない、昭和３０年代の女子大生の方がよっぽど一所懸命。理屈っぽい女性でなかなか立派だった。Ｐ１７５　女子学生の心構え　学校に憤りを、生徒に憐憫を　彼のみに
それから先生は何故引きつけていくか。人格を育てる。自分たちに与えられた指命を考えている。旦那を籠絡するところは、なかなかのものだと思う。昔の方が理想を持って規律がきちんとしていた。次郎は左翼思想だったが、マルクス主観というコンプレックス、欧米に対するコンプレックスなどエネルギー源になっていた。今はそれはない。元気がいい。美術館は女性。男子は家で引っ込んでいる。男も女もこの時代は上だったのではないか。韓流など志、哲学はない。

Ｈ：私は石山健。韓国の旅行に行った。ゆっくりした性格で飛行機に乗り遅れた。金浦空港で自分一人で移動しようとしたが怒りもしないで、待ってくれた。いつも時間通り間に

合わないで、集団とは寛容性が必要だと普通の人とは違う寛容さが違うものがあった。
３回出席すれば許してあげる。

Ｉ：前のことを忘れてしまっているが前のことを読んでみた。直子とトミ子の考え方の違い。たいへん面白く読みました。自分で感じたことは、先生の理想とするような模範生として生きている。自分というのを生きている。自分というものを立派に高めている。結婚観をきちんとしたものを持っている。小さくしなくてはいけない。世に出ての自分としての自立した女性の生き方。トミ子は結婚にあこがれている。良い結婚、その結婚によって自分が高められるような理想的な結婚をしたい。もう一人春子は常に控えめで目鼻たちがはっきりしている女性なのに控えめ。それぞれ三人三様の生き方を示している。寮は監獄のような生活。先生が確認しながら手紙をみる。教育者として何か間違っているという気持ちを持つ。

Ｓ：未亡人覚悟で結婚できるか。相手を望んで、自分も好きであればしたと思う。

Ｊ：芹沢作品の中には軽いタッチだと思う。荒っぽい読み方をした。この時代日本では大学は２０数校しかない。東京女子大。モデルはないといっているけど設定条件は、どうか。将来どうあるべきか。戦争ちょっと前ではどうか。男に対してどう質問したらよいか。何のために東京に出てきたか。ものつくりはなくしてはいけない。大学に行くと友達との交流が無形の財産になる。どっちが正しいか、ご機嫌というけどある場所ではおきげんという。

Ｋ　：１１月８日常設展世田谷文学館に載せる。芦花公園で降りる。この小説は新聞小説で読みやすかった。作者の主人公に対する配分は面白かった。小川さんという男性が招集されて軍隊に行かなければならないのにゴルフに行っているなど父親がかねがね思っている事など内容が大変豊かだと思った。大学で勉強する３人。高校でもこの人に似ていると思った。これは、空白というか読者を引っ張っていく作品ではないか。

Ｌ：愛と死の書を書きに行っている、芹沢先生は軍部が勝手に作った敵である、戦地で激励をすると相手を殺すことになり、未亡人を励ます、浜口おさちの娘にフランス語を教える経験があったのでこういう作品になったのではないか。私は、女性の中にいる生活をしているのだけれど女性の気持ちをわかって無いと批判されるのだけれども、このテーマにあまり感じなかった。春山先生が級長が部屋を外してくれと言われて、・・・監督者の前で堂々と意見が言えないのはおかしい。手紙をこちらに見せなさい。通学は、下宿は認めない。すべて寄宿舎。躾を厳しくする。春山先生の存在感を感じた。ここは学校ですといえる存在感。作品と関係ないけど、暴走族を追いかけた。何で逃げるんだとけっ飛ばして減俸になった。民主主義だということでプロフェッショナルになりきるのは難しい。そういうところを感じた。春山先生の存在になれと豊田に言いたい。

Ｍ：時代錯誤を感じる。時代を認識させる。少女小説として読んだ。若い女の子を相手に

して読んだ。学校の様子は当時はこうだった。舎監の権威と見張りの怖さがあった。トミ子自身が言いたいことを言って、結婚が目的としてがっかりした。手練手管で結婚してからそれからなんとかしようと考える。思想的なものは、なんら感じない。女の園を書き上げていない。

Ｎ：私はＰ２７３間でしか読んでいない。長編小説としておもしろかった。会話文がなめらかだった。３人の女性の会話というのがなかなかおもしろかった。思想的なものが面白かった。直子は小川さんと婚約し、躊躇するところはこの３人で２３７ページのなかで人物は直子ではないかなあと思う。なかなか面白いというのが第一印象。

Ｏ：幸福の鏡は初めて読むのでどういう展開になるのかという楽しみはありました。幸福を持つ鏡・・という気持ち。それぞれの環境の違い。理想的な結婚観がある。結婚するとしても自分を完成させてから結婚したい。安易に婚約者は受け取る。何不自由なく育った直子をうらやむ気持ちがあった。理想的な結婚が出来るトミ子のしたたかさ、今後の展開がどうなるのだろうか。すぐに結婚はしない。学問を追究していきたい。何事も女子だけではなく、これからの展開が楽しみだ

Ｐ：勉強会で遅れた。新聞小説として言われてなるほど。女性が絶対言わない言葉が出てくる。いつの時代変わりない。薬剤師の世界では、結婚してやめるのは多い。職業婦人としてのきちんとしたプライドがない。中地半端さを感じる。一人前の女性になりきれてないのを感じている。

主観的な記録です。公式な内容ではありません。